5/12/2003

＊キリスト教学特殊講義＊＊＊＊＊　S. Ashina

第三章：形而上学再考

3－1：問題

3－2：形而上学とキリスト教思想 ── ハイデッガー、パネンベルク ──

3－3：「宗教と科学」問題群と形而上学 ── ギルキー ──　5/19

3－4：形而上学の可能性 ── ホワイトヘッドとプロセス神学 ──　5/26, 6/9,16,30

＊宗教的多元性 ― 対話 ― 平和 ― グロ ― バル化

(EXKURS1)

・「宗教間対話と平和思想の構築－現状と課題－」(10月25日、COEシンポジウム)

・「キリスト教思想の再構築とアジアの宗教的多元性」

(『宗教のポストグローバリゼーション』大正大学出版会)

・「多元性・グローバル化とキリスト教」「民族主義と平和」(『現代を生きるキリスト教』

教文館、の改訂)

1. 多元化とグローバル化－現代の宗教的状況の文脈として－
2. 民族主義と平和思想
3. 宗教間対話と平和の神学
4. キリスト教思想の再構築

１．多元化とグロ ― バル化－現代の宗教的状況の文脈として－

1. 現代世界を理解するキー・ワードとしての多元化とグローバル化
2. しかし、宗教とどんな関わりがあるのか。
   出家、修行、人間的束縛からの自由
3. 宗教と文化の関係の二重性：超越と内在
4. 宗教と社会状況との相関性 (宗教は社会の鏡である)
5. 現代社会の多元化とグローバル化は宗教とも無関係ではない。
6. 多元性 (記述概念) と多元主義 (規範概念) 、複数性
7. グローバル化：経済と情報と環境におけるグローバルな一体化
   国民国家、民族主義を超えて
   類似現象：広域的 (そのつどの全体性) 一元化
   世界宗教の主張の実質化
8. 現代の宗教的状況：近代化・世俗化以降の状況
9. 多元化とグローバル化との緊張関係 (グローカル)
   諸宗教・諸イデオロギーの多元性を前提にした秩序の構築・共有
   近代市民社会モデルは有効か？
   cf.　イスラームの政教一致とそのもとにおける宗教的寛容
10. 聖書の宗教から見て：言語の多様性・分裂 (自然と文化) とその克服の試み
   創世記10章と11章 (バベル)

帝国主義的一元化の破綻と拒否：反王制イデオロギー
多元性の新しい意義付け・新しいモデル
ペンテコステ・モデルはいかに具体化されるのか。

11.信徒言行録

2:1 五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、2 突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。3 そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。4 すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話しだした。

12.問題設定：対立・紛争、伝統的なアイデンティティの危機
状況適応性と自己同一性との相関構造（モルトマン）

13. （1）民族主義と平和思想
（2）宗教的多元性の下での宗教間対話の意義（可能性・現実性、具体性）
（3）キリスト教は新しい自己同一性の自覚・表現を求められている

＜文献＞

1. 阿部美哉　「グローバリゼーションと宗教」『宗教研究　特集：近代・ポスト近代と宗教的多元性』第75巻329-2　日本宗教学会　2001年
2. 土屋　博　「教典と現代宗教」『教典になった宗教』北海道大学図書刊行会　2002年
3. 山内昌之　『民族と国家－イスラム史の視角から－』岩波新書　1993年
4. 芦名定道　『ティリッヒと弁証神学の挑戦』創文社　1995年

２．民族主義と平和思想

１：はじめに

キリスト教は民族といかなる関係にあるのか。
明治の天皇制国家形成期に活躍した日本のキリスト教徒、とくの内村鑑三と、彼の思想を継承した無教会の平和思想を取りあげてみよう。

２：明治キリスト教と日本民族

1. 「二つのＪ」：「小生は単なるクリスチャンの日本人として生き、普通の日本人として死ぬ事を願います。キリストと日本とは小生の合い言葉です。」（1885年、新島襄宛の手紙）
2. 「当時のキリスト教指導者は、明治人にふさわしいナショナリズム意識の持ち主であった。彼らは、キリスト教を近代国家としての日本の建設のための精神的基礎と確信していた。」（土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史』新教出版社　１１６頁）

３：内村鑑三の戦争論

3. 内村の戦争論：「義戦」（日清戦争）→　非戦論
日本は欧米の進歩的文明をアジアに紹介し、それによって保守的な東洋を啓蒙するという世界史的使命を有している。清国を啓蒙するのが日本の使命（１８９２年の『日本人の天職』、１８９４年の「日清戦争の目的如何」）
4. 「<<義戦>>はほとんど略奪戦に近きものと化し、その戦争の<<正義>>を唱えた予言者は、今

や深い恥辱のうちにあります」（ベル宛の書簡）、「余は日露非開戦論者であるばかりでない。戦争絶対的廃止論者である。戦争は人を殺すことである。そうした人を殺すことは大罪悪である。そうした大罪悪を犯して、個人も国家も永久に利益を収め得ようはずはない」（「戦争廃止論」）。

①キリスト教的良心＋社会科学的歴史認識

「足尾銅山鉱毒事件は大日本帝国の大汚点なり」（「鉱毒地巡遊記」）

矢内原忠雄：武力をもたぬ日本の経済的復興は、日本の民主主義国家としての再建と、国際経済に於ける自由の恢復とを条件として、世界経済全体の復興の一部として実現せられて往くものと考へられる。その場合、武力をもたぬことは日本の経済的復興の妨げになるどころか、却つて利点となるであろう。」「相対的平和論と絶対的平和論」(1951)　（『現代社会とキリスト教』岩波書店）

経済学的見解＋キリスト教による日本国憲　法の平和原則の思想的基礎付け

②基督再臨運動と農本主義

「第一に戦敗必ずしも不幸にあらざる事を教えます。国は戦争に負けても滅びません、実に戦争に勝って亡びた国は歴史上決して少くないのであります、国の興亡は戦争の勝敗に因りません、其の平素の修養に因ります、善き宗教、善き道徳、善き精神ありて国は戦争に負けても衰えません、否な、其の正反対が事実であります」、「国の実力は軍隊ではありません、軍艦ではありません、将た又金ではありません、銀ではありません、信仰であります。」

（「デンマルク国の話」『後世への最大遺物・デンマルク国の話』岩波文庫）

4：むすび

「良心的兵役拒否は、他の多数のひとに関わる義務からの逃避でないとすれば、紛争解決の手段としての戦争を批判するのみでなく、戦争に代わる解決方法をみずからも積極的に提示し実現する努力が問われているであろう。」

（宮田光雄『非武装国民抵抗の思想』岩波新書）

３．宗教間対話と平和の神学

1. 宗教的多元性の下での宗教間対話の意義（可能性・現実性、具体性）
   何のための対話なのか。宗教にとって対話はいかなる必然性を有すのか。
2. 問い・状況の共有から出発すること：平和、貧困、環境、人権
   課題の共有と単独での解決の不可能さの自覚
3. 平和論の二つのレベル：状況の具体性の中で／宗教固有の問いとして
4. モデルとしての古代イスラエルの宗教：
   民族宗教　→　正義・公正・平和・和解・普遍的救済
   民族宗教で有り続けながら／民族宗教を超えて
   普遍性における特殊性の意義（普遍性は生成の内にある）

＜イザヤ書＞

5:8 災いだ、家に家を連ね、畑に畑を加える者は。お前たちは余地を残さぬまでに／この地を独り占めにしている。9 万軍の主はわたしの耳に言われた。この多くの家、大きな美しい家は

／必ず荒れ果てて住む者がなくなる。

11:1 エッサイの株からひとつの芽が萌えいで／その根からひとつの若枝が育ち2 その上に主の霊がとどまる。知恵と識別の霊／思慮と勇気の霊／主を知り、畏れ敬う霊。3 彼は主を畏れ敬う霊に満たされる。目に見えるところによって裁きを行わず／耳にするところによって弁護することはない。4 弱い人のために正当な裁きを行い／この地の貧しい人を公平に弁護する。その口の鞭をもって地を打ち／唇の勢いをもって逆らう者を死に至らせる。5 正義をその腰の帯とし／真実をその身に帯びる。6 狼は小羊と共に宿り／豹は子山羊と共に伏す。子牛は若獅子と共に育ち／小さい子供がそれらを導く。7 牛も熊も共に草をはみ／その子らは共に伏し／獅子も牛もひとしく干し草を食らう。8 乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ／幼子は蝮の巣に手を入れる。9 わたしの聖なる山においては／何ものも害を加えず、滅ぼすこともない。水が海を覆っているように／大地は主を知る知識で満たされる。10その日が来れば／エッサイの根は／すべての民の旗印として立てられ／国々はそれを求めて集う。そのとどまるところは栄光に輝く。

14:3 主が、あなたに負わせられた苦痛と悩みと厳しい労役から、あなたを解き放たれる日が来る。4 そのとき、あなたはバビロンの王に対して、この嘲りの歌をうたう。ああ、虐げる者は滅び／その抑圧は終わった。5 主は、逆らう者の杖と／支配者の鞭を折られた。6 かつて、彼らは激怒して諸民族を撃ち／撃って、とどまることを知らなかった。また、怒って諸国民を支配し／仮借なく踏みにじった。7 しかし今、全世界は安らかに憩い／喜びの声を放つ。8 糸杉もレバノン杉も／お前のことで喜ぶ。「ついに、お前が倒れたから／もはや、切り倒す者が／我々に向かって来ることはない。」

19:21 主は御自身をエジプト人に示される。その日には、エジプト人は主を知り、いけにえと供え物をささげ、また主に誓願を立てて、誓いの供え物をささげるであろう。22 主は、必ずエジプトを撃たれる。しかしまた、いやされる。彼らは主に立ち帰り、主は彼らの願いを聞き、彼らをいやされる。23 その日には、エジプトからアッシリアまで道が敷かれる。アッシリア人はエジプトに行き、エジプト人はアッシリアに行き、エジプト人とアッシリア人は共に礼拝する。24 その日には、イスラエルは、エジプトとアッシリアと共に、世界を祝福する第三のものとなるであろう。25万軍の主は彼らを祝福して言われる。「祝福されよ／わが民エジプト／わが手の業なるアッシリア／わが嗣業なるイスラエル」と。

53:4 彼が担ったのはわたしたちの病／彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに／わたしたちは思っていた／神の手にかかり、打たれたから／彼は苦しんでいるのだ、と。5彼が刺し貫かれたのは／わたしたちの背きのためであり／彼が打ち砕かれたのは／わたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによって／わたしたちに平和が与えられ／彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。6 わたしたちは羊の群れ／道を誤り、それぞれの方角に向かって行った。そのわたしたちの罪をすべて／主は彼に負わせれた。7 苦役を課せられて、かがみ込み／彼は口を開かなかった。屠り場に引かれる小羊のように／毛を切る者の前に物を言わない羊のように／彼は口を開かなかった。8 捕らえられ、裁きを受けて、彼は命を取られ

た。彼の時代の誰が思い巡らしたであろうか／わたしの民の背きのゆえに、彼が神の手にかかり／命ある者の地から断たれたことを。9 彼は不法を働かず／その口に偽りもなかったのに／その墓は神に逆らう者と共にされ／富める者と共に葬られた。10 病に苦しむこの人を打ち砕こうと主は望まれ／彼は自らを償いの献げ物とした。彼は、子孫が末永く続くのを見る。主の望まれることは／彼の手によって成し遂げられる。11 彼は自らの苦しみの実りを見／それを知って満足する。わたしの僕は、多くの人が正しい者とされるために／彼らの罪を自ら負った。

56:3 主のもとに集って来た異邦人は言うな／主は御自分の民とわたしを区別される、と。宦官も、言うな／見よ、わたしは枯れ木にすぎない、と。

65:1 わたしに尋ねようとしない者にも／わたしは、尋ね出される者となり／わたしを求めようとしない者にも／見いだされる者となった。わたしの名を呼ばない民にも／わたしはここにいる、ここにいると言った。2 反逆の民、思いのままに良くない道を歩く民に／絶えることなく手を差し伸べてきた。

5. 特定の宗教を超えた正義とそれに基づく和解

特殊性を超えた、しかも特殊性を肯定する普遍性。

この意味における普遍性に貢献するものとして、それぞれの宗教は自らの伝統より何を提起できるのか。

４．キリスト教思想の再構築

1. キリスト教は新しい自己同一性の自覚・表現を求められている

変わるものと変わらないもの、宗教的多元性における自己同一性

普遍性の主張の再検討：いかなるグローバル化をめざすのか

2. 「排他主義／包括主義／多元主義」という枠組みで十分か
3. キリスト教の変革という視点は？　cf. カブ

「変化してもキリスト教であり続ける」、あるいは「変化の中においてこそ真にキリスト教になる」

4. 東アジアにおけるキリスト教の再構築

家・家族の問題

＜文献＞

芦名定道　「東アジアの宗教状況とキリスト教」、『アジア・キリスト教・多元性』創刊号
現代キリスト教思想研究会　2003年